

中支

中支戦線従軍記

愛媛県 村上龍夫

私は昭和十五年度徴集です。

昭和十五年十二月一日現役兵として高知市朝倉の歩兵連隊へ入隊。

昭和十六年二月中支の漢口へ移り、幹部幹候生。

昭和十七年三月三十一日久留米第一陸軍予備士官学

校卒業、原隊復帰。

昭和十七年十二月一日予備役将校任官。

第四十師団（鯨兵团）歩兵第三百三十六連隊第一大隊第二中隊です。私の入営時の家庭の状態は、

父母 共に死亡

祖父母既に死亡

兄弟 なし。

その上、叔父二人、共に従軍出征中（共に昭和二十年戦死）で気楽な一人者。神戸市の三菱海上火災保険の会社員でのんびりと暮し、入営に際しては、「男児の本懐、勇躍して聖戦におもむく。」でした。後顧の憂いはなく、上の叔父宅に後事を託し、神戸の中突堤より多数の社員の見送りを受け、高知港行の客船に乗りました。

思い出の第一は失礼ながら下痢病の克服です。昭和十六年七月から八月のころ、ところは中支湖北省大冶県城内の連隊本部で、ハリキリ教官殿（陸士五十三期連隊旗手）の下での幹候教育隊でのことでした。ちょ

うど、甲と乙の合格、不合格の別れ目を目前に控え、大陸の炎熱下、文字通り日夜を分たぬ猛訓練に、ただもう気力だけで頑張っていた最中に、下痢に犯されました。平素の何でもない時なら練兵休でゆっくりと静養出来ませんが、何しろ甲、乙の分れ目を控えているので、下痢をおして毎日の教育訓練に参加しました。

恐縮ながら、水よう便、血便をこえて白い糊状と変わりました。幸いにも熱発はあまり感じなく、回数は一日数回程度、食事は普通食。連隊本部の医務室で症状を訴えて薬を貰うと、木炭の粉末をくれ、服用すると真つ黒の便です。毎日何とか演習に出ていて、これでいいのかなと思いました。その中に若さと気力で徐々によくなりやれやれでした。

甲種に合格した後で、隊友と四方山話しの時、この件を話しに洩らすと、「実は、ワシも同じ」「ワシも」「わしも」と同じ病気に苦しんだ幹候隊員が意外に多かったのにはビックリして、皆顔を見合わせては全快と合格を喜び合ったものでした。こんなことは平和な日本、内地では想像もできぬこと、戦地という条件で

の特殊な事例でしょう。

思い出の第二は、昭和十七年三月三十一日、久留米第一陸軍予備士官学校卒業式のことです。当日は時の教育総監陸軍大将山田乙三閣下の来臨あり、学校長陸軍少将大場弥平閣下の訓示は「卒業お目出とう。諸子は第一線の消耗品である。深く桜の花と散って来い。」と、これまた度胆を抜かれました。忠勇なる生徒は校長閣下の教訓を實踐し、小隊長、中隊長あるいは本部付将校として、勇戦中、護国の鬼と化したもの大変多い。合掌。

思い出の第三は、戦傷（胛下腿骨折貫通銃創）のこと。新品見習士官の新米小隊長として昭和十七年五月三十一日、夜、雨の降る中を南昌付近の望城崗の宿舎を出発、浙贛作戰に初陣参加した。負傷したのは六月六日午前のこと。それまでの行軍中に、相手も行軍中の敵と遭遇し、こちらは先に発見、布陣、重機、軽機で打ちまくり、敵は多数の死体を遺棄して後退したり、小さい温泉のある山頂でこれまた予想以上に敵に打撃を与えたりして、幸先のよい戦況で幕を明けた。一M

G（第一機銃）の三谷隊長が「今年の見習士官は幸せ者よ。初めから勝ち戦ばかりでの。そのうちこじゃんと叩かれるぞ。甘くはないぞ。」と警告して呉れたのを覚えている。

この間に、第一大隊長、温品少佐さんが流れ弾で足に貫通銃創を受けられ、駕籠に乗って戦闘指揮をされておりました。雨に降られた夜行軍で六月六日深更の早晩暗夜の中で、上海戦線生き残りの都築第一中隊長が、擲弾筒の目くら打ちが不幸にも当たり、前腕部をふっ飛ばす重傷。陸士五十四期の木下第三中隊長が敵の手榴弾を受け右半身全体に数十個所の破片創。第四中隊では同期の田中見習士官小隊長が右肺貫通銃創とそれぞれ負傷し、また下士官、兵にも相当の損害を出していた。

私は第二中隊長より、「右前方のチエコMGと迫撃砲の陣地を攻略せよ。」との命令を受けて小隊を集め、攻撃前進に移った。友軍のMG、大隊砲、山砲等ある限りの火砲の援護を受けた。今いる処は盆地の底の樹木の多い部落（部落名は視下張下と現認証明書に見え

る）の民家である。今井連隊長以下の支隊が集結して馬も多くいる。敵の迫撃砲が四方の山頂の陣地から集中して来る。一刻の猶予も出来ない。

第一大隊の四個中隊がそれぞれ、東西南北の敵陣へ突撃することになった。今思うと四個中隊の突撃コンクール。しかも大隊長、連隊長以下多くの隊長、将校の眼前、張り切るのは当然である。地形は平底にある部落实の周囲は一面の水田で、細い畦道が敵の陣地のある山の方へ通っている。水田の奥行は、二百メートル〜三百メートル、深さ七センチの水が溜り、高さ三十センチ位の稲の苗が植わっていて、眺望すると目を遮るもの一つもない難所である。

各個前進で水田を走り、弾幕を突破する以外ない。外の中隊も皆同じ。雨は降る。敵の陣地の山は百メートルぐらいの高さであるが、雨雲が去来して、目標は確定できぬ。発射音をたよる以外ない。小隊員はすべて田の畦道の片側を利用して、身を隠している。いよいよ桜と散る時がきたと、一瞬校長閣下の訓辞がよみがえる。まず小隊長の自分が決死の覚悟で先頭を切り、

水田の中をまっしぐらに走り抜ける。敵のチエコや水冷MGは悲鳴を揚げるように音高に鳴り響き連射してくる。その銃弾は私の前後左右に水煙をあげる。やつと水田の平坦地区を走り抜けて、堤防下の安全地帯へ着く。よくもまあ二百―三百メートルの水田を無事生きて来たものと、神仏に感謝したのを思い出す。全員無事追いついてきた。命令とはいえ、有り難いことだ。

各分隊長は「小隊長を見殺しにするな。中隊長、大隊長、連隊長と皆見てくれている。卑怯な真似をするな。」と叱咤している。堤防の向うの山肌は松の疎林と低い草むらの点在で小さい稜線も幾つか連続している。まるで久留米の高良台とよく似て、違うところは一段と高い頂上にチエコ水冷MGが布陣して雨あられと撃ってくる。学校の演習と異なり、ここは戦場である。入営前に上京して参拝した靖国神社が目に見えぬ。

「分隊長前へ」で各分隊毎に目標（はつきり見定められぬので発射音をたよりに）、突撃開始地点、占領後の任務等を指示した。この世の別れとタバコ一服をすすめて廻しのみ。自分も最初に深く一服した何か頭

の中が空っぽであったようだ。今来た後方へ中隊の指揮班が後詰めか、古豪の班長が十人余り率いて、戦況をうかがっているのが見える。四方の山より射ち出す敵の銃砲声、援護してくれる友軍の銃砲声が入り交じり、重なり合って耳もツンボのよう。ちよつと離れると話が聞こえない。ようやく気力を集中して腕を振り合図。真先に山肌の松の幹目がけて上り斜面を駆け上がる。第一分隊長と当番兵もう一人計三人が私の楯になつて走っている。己れを犠牲にする戦友愛にいいようがない。

松から松へとジグザグに攻め上がり、その間小さい稜線を何回か超えて、最後の最大の斜度のコースへ出る。敵陣まで直距離にして四十―五十メートルぐらいか。突撃である。母の実家（宇和島藩士族）より貰つた日本刀を抜いて喚声を上げて突進する。旅順の二〇三高地における第十一師団の先輩が目に見えぬ。

十メートル余り走ったか。突然両脚の膝の裏側を細い鉄棒で強く殴打された感じで、思わず前へ倒れた。その瞬間、自分は負傷したことが分からない。数秒た

ったか、両脚の皮、脚絆の上の膝関節のお皿の下がそれぞれ一カ所ずつ軍袴に小さく赤く血が出ている。脚が痛くて動かない。最初に負傷を知った。

思わず「あつ、やられた。残念」と叫ぶ。すかさず横の分隊長が、「当番、小隊長負傷、両脚じゃ。背負って本部へ後退。わしは上へ攻める。」と寸刻をおかす適切な処置。

岡田当番兵の背中に背負われて下り始めたが、その間敵陣より若い兵が数人身を乗り出して、柄付き手榴弾を投げてくる。恐い。幸い手榴弾にはやられず無事連隊本部の人家へ到着。中隊長と大隊本部の軍医、衛生兵が飛んでくる。鉄で被服を切り開き、脚絆、地下足袋、靴下を脱がせてくれた。瓦斯壊疽の予防注射、貫通部の消毒と手当。何だか夢を見ているようでピンとこない。

間もなく連隊長が自ら見舞ってくれた。「村上よ、よう頑張った。連隊長はしっかり見ていたぞ。」と。何だか温かい親心に接して心が和むのを覚えた。

さて、これからが大変。一日おいて七日夜、捕虜の

苦力に即製の担架を担がせ、私は担送患者で苦力に運ばれる。護衛一個小隊がついて案外と多い負傷者の後送開始。軍刀、眼鏡、その他の装具は当番兵が持つてくれる。苦力は四人で私を担いでいる。真暗な夜の道を探しつつ進む。時としてパンパンと残少敵の散発がある。苦力はその度に担架を放り出して地面へ伏せて身を守る。私は放り出されて大変。担送患者で歩行不能だから恐い恐い。手榴弾を一発貰い自決用にと携行した。一日半ぐらいか、轡江という大きい河へ着いて、工兵隊の鉄舟へ乗る。

「護衛小隊よご苦労さん。無事本隊へ追及成功を祈る。」と握手して別れた（無事に追及できた由で、何よりと慶んでいる）。

鉄舟の中も楽ではなかった。真夏のカンカン照りの太陽に曝されて、病臥するのも大変だ。その中に全身紫色にハレ上がり、死んでゆく傷兵が沢山出始めた。負傷者が予想外に多く出て、注射薬が不足した。そのため注射に洩れた者に瓦斯壊疽が出た由。思わず神や仏に祈った。二日ぐらいの行程で舟は南昌へ着いた。

トラック輸送に切り替える。道路の凹凸が多いのでトラックの上で寝ているのも大変な苦痛である。その中南昌の街にボツボツと電灯が見え始めた。その時の嬉しさは忘れられない。

作戦地域は電灯も照明もない真暗だ。電灯照明のある文明地域へ辿り着くと、いいようなない文明の恩恵を感じる。「やれやれ助かったか」と感無量になる。経験者にしか分からぬことである。

南昌陸軍野戦病院へ収容された。病院の中は電灯が明るく沢山ついて極楽のようだ。日赤の香川班のお姉さん看護婦約十名。甲斐甲斐しく、テキパキと、優しくて温かい。治療台の上へ。軍医さんが「こりゃいいん。ひよつとすると右は切断かも。ガスが廻り始めている。とにかくこの辺大きく切り取らにゃ。」と右脚ふくらはぎ上部裏側の柔い部分の肉を大きく深く切削し、「これで治つても右はピッコぞ。ガスの具合では大腿部より切り落とす。」「両下腿骨折貫通銃創」と病臥日誌へ。

両脚共膝上二十センチより足先までギブス巻き。都

築、木下の両中隊長と三人揃って将校病棟へ収容された。

先客が一名すでにいる。よその師団の准尉で、地雷を踏んで片手片足切断、残る片手片足骨折ギブス巻き。大きく濃い鼻髭が威勢がない。ウンウンと唸っていた。危篤状態で対話は不能。数日後無念にも死亡。祈御冥福。

六月の夏涼しい風通しのよい部屋で三人一緒である。二日に一回の割で看護婦さんお手製のアイスクリームを頂き、二人の中隊長とともに前線を拝んだ。約一週間してお別れだ。二人の隊長は九江へ出て南京へとか。私は生れて初めて患者輸送機で空路漢口へ。担送のまま積み込まれて、そのまま床の上へ。時々上体を起こして小さい窓越しに外部の風景をたのしむ。好天のせいか快適。支那大陸を上空から見られるのも、不幸中の幸か。

漢口へ着いて真先に小便をさせて貰った。薄い白衣一枚、その外は越中褌一枚のみ。夏とはいえ数千メートルの上空を約一時間飛行すると尿意を催すものか。

漢口では同期の小野見習士官（九中隊）が先着で、片方の脚にギブスをはめて、松葉杖をつけてこちらの病室へ来た。緒戦の敵前渡河でやられた由。「ボートが敵弾で穴があいて半分以上沈み、水に流される真暗の夜間、艇内に負傷者が出る、そんな状況下で兵二名が怖い怖いと泣き叫んだのは弱ったぞ。」との初陣談。

数日でこちらは病院船で南京へ。同室は航空パイロットの少尉。上り便と違い、下り便はあつという間である。揚子江の沿岸の風景も矢のように走り去った。

南京では先に南昌で別れた二人の中隊長さんと再会。腕一本失った都築さんは間もなく内地送還で永のお別れをした。主治医は吉岡少佐殿。温厚な見るからの好紳士。右下腿のお皿の下の内側へノミでコソコソと穴をあけて、関節のひびわれた隙間に詰まった小さい骨片を、とり出す手術を四回繰り返したが、排膿が止まらず先生も困っていた。

治療せぬまま、包帯をまいて十一月退院、漢口、武昌、蒲圻を経て賀家湾の第二中隊へ帰りました。

南京では浙贛作戦の負傷将校も多く入院し、支那派

遣軍総司令官元師畑俊六閣下のお見舞を受けた。さすがに大した貫祿で威容充分、参謀、副官とお供が多いのに驚いた。また、ある日、将校病棟がバタバタと取り込んでいるので、婦長さんに聞くと「師団長の馬が地雷を踏んで師団長の片脚がとび、ここへ入院して来る」と。結局は病院へ来るまでに、死亡されたとか。

大変なことだ。軍人はよく「一将功成りて万骨枯る」とはいえ、師団長、軍司令、連合艦隊司令長官（山本五十六がその例）も戦死している。軍人が戦場に立つ以上、命の保証はない。きびしい戦場の掟である。

中隊へ復帰したが、大隊本部の医務室で右脚の治療を続け、補充兵教育の教官を命ぜられたが、その責任を果たせず、申し訳ない次第であった。結論として、武昌の陸軍病院へ再入院し、再三の手術を受け、最後に伴軍医大尉の新しい方法の手術で排膿も止まり、右脚のピッコを引きながら退院帰隊した。

思えば長い闘病生活であった。同期の将校は皆第一線で苦勞しているのに、自分は独り病院生活とは、淋しい思いである。中隊は作戦出勤中で、留守警備の曹

長が話をしてくれた。「村上少尉殿は浙贛作戰では特に連隊長殿の指示により殊勲の申請をしました」との由。面はゆい氣持であった。

そのうちに五十三期の中隊長は、熊本の学校の教官（区隊長）として数々の武勲を称えられて内地へ帰り、後任として五十四期のおとなしい方が着任して来た。私はその後一年志願の古い將校（中尉で中隊長、大隊副官等）および古年次兵等の内地満期に繰り入れられて（右脚のピッコのため）、浦口（南京の対岸）―山海関―奉天―釜山と夏の貨車輸送で全員禪一枚、一週間余りで高知着。満期除隊。二十年四月再び応召。終戦に至る。

最後に右脚の経過がよくて切断されず、両足そろって残っている幸せを噛みしめては、約半数近い戦死した同期の幹候將校の冥福を祈るや切なるものがあります。

徐州戦

兵庫県 川戸 庄治郎

私は大正五年三月二十三日生まれで昭和十二年一月十日現役兵として鳥取歩兵第四十連隊に入隊しました。

「麦と兵隊」歌の文句にある如く、徐州戦は行けども行けども麦また麦の大平原を鳥取第四十連隊第二大隊は太く長い帯となり、連日連夜の進撃を行った。重い背囊にそして銃、髭はポウポウ伸びほうだい、汗にまみれ、泥にまみれ、唯黙々と進んで行く。馬も征く、車も征く、黄塵はモウモウと舞い上がる。

徐州攻略前哨戦、鉢巻山の攻撃に続き、後堡部落と幾つもの要衝を突破した我北川中隊は、次は前堡部落の薄暮戦となっていた。

当時二十倍の敵軍であったと聞く。支那総統蔣介石の精銳は部落の全面に広がる麦の中に数知れぬタコツ